

過度な飲酒 高リスク

神戸市立西神戸医療センター

伊丹淳 外科・消化器外科部長 54

食道がんは、胃がんや大腸がんに比べて発生率は高くないが、早期発見が難しく、症状が表れた時には進行していることが多い。手術経験が豊富な神戸市立西神戸医療センター（神戸市西区）の伊丹淳外科・消化器外科部長（54）に、症状や治療法を聞いた。（聞き手・高木文一）

食道がん

—主な症状は。

食道の内側の粘膜から発生し、進行に伴い粘膜下層、筋層、外膜へと達します。その過程でがん細胞が血液

やリンパ管に入り込み、リンパ節や肝臓、肺などに転移することがあります。早期の場合、ほとんど自覚症状はありません。痛みを感じることもなく、気づきにくいのです。食べ物がつかえたりするといった症状が出た時には、「ステー

病院の 実力

*兵庫編156

ジ2」以降の可能性が高いです。

—早期発見するには。内視鏡検査を定期的に受けるのが最も有効です。

このがんの特徴として、50歳以上の男性に多く、喫煙と過度なアルコール摂取が発生リスクを高めることがわかっていきます。特に飲酒して顔が赤くなる人は、アルコールを分解する働きが弱いので、危険性が高くなります。今はそうではなくても、昔は赤ら顔になっていた人も同様です。思い当たる人ほど、定期的の内視鏡検査を受けるべきです。

—主な治療法は。

早期の場合は、胃カメラをのんで、粘膜ごとがんを切除する内視鏡治療が受けられます。

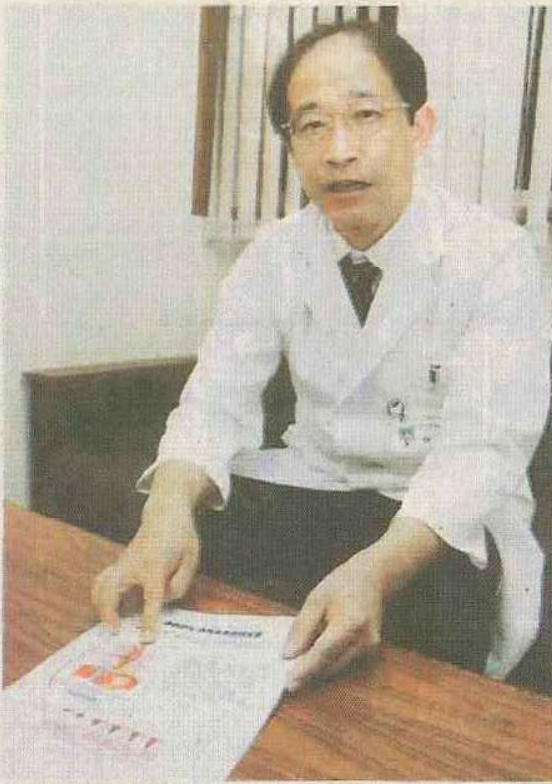
「ステージ2」以降になると、食道の病巣と転移の可能性がある箇所を切除するのが一般的です。具体的には、食道と胃の一部を切除し、残った胃を細長く伸ばしてのど元の食道とつな

げて再建します。手術前には抗がん剤による補助的な治療も行います。

—センターの治療方針は。

患者の負担が少なく、回復が早い「胸腔鏡手術」に力を入れていきます。胸に開けた小さな穴からカメラや器具を差し入れて手術する方法で、胸を切開する「開胸手術」に比べて傷口が小さく、痛みも少なく済みま

す。術後のサポートも大事にしており、手術をしてのみ込む力が弱くなると、誤嚥性肺炎などの合併症を引き起こすので、看護師だけでなく、専門の理学療法士がリハビリに当たります。各診療科や部門を横断した「チーム医療」を大事にしています。



「定期的の内視鏡検査を受けてもらい、早期発見につなげてほしい」と話す伊丹部長（神戸市立西神戸医療センターで）